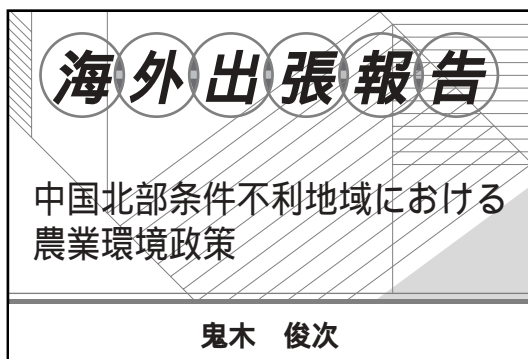




2004年8月5日から14日まで、中国北部の条件不利地域における農業環境政策に関する調査のため、呼和浩特市および鄂尔多斯市を訪れた。滞在中に内蒙古大学で行われた日中共同シンポジウム「中国北方地域における環境保全型農牧業と循環型経済の発展」に参加し、研究報告を聞く機会を得た。シンポジウムでは中国北部の農業環境問題一般について様々な研究報告があったが、その中でも特に多かったのは砂漠化に関する報告であった。

中国の国土の約半分は年降水量400mm未満の乾燥・半乾燥地域であるが、現在、その多くが砂漠化の危機に直面している。すでに砂漠化した面積は日本の国土の約半分の面積に及び、さらに毎年、鳥取県とほぼ同じ面積が砂漠化しているということである。

シンポジウムで思ったことであるが、中国の砂漠化に関する研究は、植生や気象の観測など自然科学分野では進んでいるが、社会科学分野ではまだこれからである。中国の砂漠化は、自然現象によって起こっているだけではなく、家畜の過放牧、過耕作、農民の薪木の採取、人口の増加など社会的な現象によって起こっている。したがって砂漠化を防止するためには、社会科学分野の研究も積極的に推進する必要がある。

シンポジウムの後、我々は鄂尔多斯市で砂漠化対策に関する実態調査を行った。調査の目的は、現地の政府部局や農家を訪問し、砂漠化防止政策の現状と課題を把握することである。この地域では2000年より家畜の放牧制限措置（禁牧、休牧）が導入され、また放牧の制限に対する政府の補助金や砂漠化地域の

農民の移住などが実施されている。このような施策は荒廃した土地の植生を回復させるのに一定の効果を発揮しているようである。ただし政策の実施に当たっては現地の農家の所得が低下して、農民の貧困を悪化させないように注意しなければならない。もともとこの地域は人口の増加により、一人あたりの牧草地が減少し、貧困問題を招いたという経緯がある。貧困は農民に無理な生産を余儀なくさせ、砂漠化の間接的な原因にもなっている。もし放牧の制限や移住政策によって新たな貧困が生まれることになれば、長期的に砂漠化の進行を食い止めることは難しくなる。いかにして貧困と環境悪化の連鎖を断ち切ることができるかよく検討すべきである。そのためには学際的な調査・研究をさらに推し進める必要がある。

近年、わが国の中国に関する国際協力は環境保全や条件不利地域の開発に重点を置くようになってきた。農業・農村分野の協力が、現地の農民の経済と環境にどのような影響を及ぼすか、持続的な発展をもたらすにはどのような支援が必要なのか、注意深く検証しながら援助を進める必要がある。



過放牧による砂漠化：放牧禁止措置のため牧柵で囲われている場所（写真右中央）では植生が回復しつつある